

家族の標本

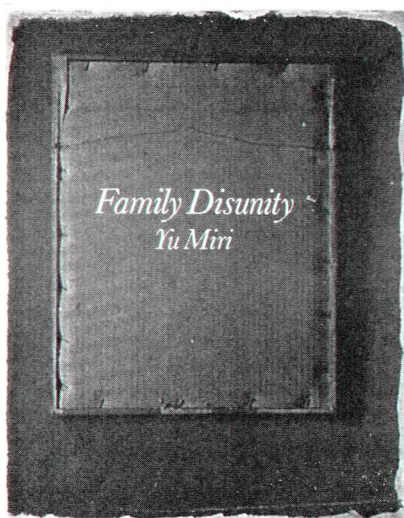
Family Disunity

Yū Miri

柳 美里



家族の標本



柳美里

柳美里（ゆう・みり）

一九六八年、神奈川県生まれ。横浜共立学園高等学校中退後、東京キッドブラザースを経て、八八年、青春五月党を結成。

九二年、『魚の祭』で第三七回岸田國士戯曲賞受賞。著書に『静物画』『向日葵の柩』（共に而立書房）、『ヒネミ／魚の祭』（白水社）、『グリーンベンチ』（河出書房新社）がある。

家族の標本

一九九五年五月一日 第一刷発行

著者 柳 美里

発行者 天羽直之

発行所 朝日新聞社

編集・書籍第一編集部 販売・出版営業部
〒104-11 東京都中央区築地五-13-12
電話・〇三-3545-0131（代表）
振替・〇〇二〇〇七-71730

印刷所 大日本印刷

©Yu Miri 1995 Printed in Japan
ISBN4-02-266846-1

定価はカバーに表示しております

目次

I

異母妹の涙	8	／	消えた母親	11
「いいな、複雑な家庭って」	14	／	母親の恋人	17
あんな二人になれるといいね	20	／	ある結婚式	23
父の墓	26	／	☆本木の老猫	29
姉に反抗したとき	32	／	泣く母	35
浜名湖競艇場の夏休み	38	／	精神科医の父	41

従姉 44 / 離婚した妻との再婚 48

けち 51 / アルツハイマー 54

二人だけの忘年会 57 / 名前を変えた娘 60

幸せな家族 63 / 定時制高校 66

日曜日の午後 69 / 見果てぬ夢 72

団地の噂話 77 / 国際家族年 80

十八年ぶりに逢った息子 85 / 秘湯の宿 88

II

クレジットカード 92 / 新興宗教 95

花見の樹 98 / シャボン玉飛んだ 101

結婚と引退	104	／	ファザー＆サン	107
愛の日記	111	／	幻のモデル	114
BARで	117	／	形見分け	120
若返った母親	123	／	ロングウオークホーム	126
ある中華料理屋で	129	／	旅の思い出がない	132
妻二人	135	／	血の繋がらない家族	138
破産を経て……	143	／	名字の違う両親	146
マイホーム	149	／	母の再婚	152
卵焼きの思い出	155	／	厳格な祖父	158
「上の家」	161	／	愛妻家	164
奇妙な男	169	／	知的な父の実像	172
恋愛必勝法	175	／	馬鹿正直	178

III

篠山紀信と父 182 / 荔枝 187

ソンナニヒドクナイカモヨ 190 / コモ 193

自転車 196 / 留守番電話 199

アメリカへ渡れなかった少年 202 / 帰化した家族 205

新しい家 208 / パリ帰りの叔母 213

妹と逢わなくなった理由 216

あとがき 219

家族の標本

装丁・亀海昌次

異母妹の涙

これは私の友人で、女優のSさんの家族の物語である。

玄関のチャイムが鳴った。Sさんは父親が帰ってきたのだと思って、インタホンを手にとると、奇妙なイントネーションの女の声が耳に飛び込んできた。

「ワタシ、孝サン^{タカシ}ノイモト、オニサンニ、アイタイ」

孝とは父親の名前だ。

彼女は肩のあたりをこわばらせて母親と姉の顔を見た。

「お父さんの妹だっていつてる。オニサンニアイタイって」

玄関を開けると中年の男女と若い女性の三人が立っていた。

その女性は、「オニサンニ、アイタイ。オトサンノ、ハカマイリシタイ。タイワンカラ

キタ」と一枚のセピア色の写真をバッグから取り出し、「コレ、オトサン」と真ん中に座っている男を指さした。

祖父は、父親が十四歳のときに病死した。三人ともそのことを知っていた。

三人の台湾人はリビングルームのソファに座った。

女性には「ニホンコトバ、スコシデキル」と、自分の名前は英子^{ひそこ}で、父親の腹違いの妹であること、一緒に来たのは夫と娘であること、二人は日本語がわからないことをたどたどしく話した。話に詰まると、リズムのない舞踊のような身ぶりで話呼び起こそうとした。その奇妙な舞踊はリビングルームにいるみんなに伝染した。興奮した母親は、近くに住んでいる伯父を呼びに行った。この人は戦争で鼓膜を破り、耳が遠い。身ぶり手ぶりに手話が加わった。

帰ってきた父親は靴を脱ぐなり、「どうして家にあげたんだ」と母親を詰^{きづ}った。

「だって、この人、和子さん（父親の姉）にそっくりじゃない」というと、父親は白いものが交じっている異母妹の髪を見た。「家にあげることはないじゃないか」と声を尖らせる父親を伯父が手話で宥^{なぐさ}めた。

「台湾の人は何を食べるんでしょうね。レストランに行きましようよ」母親はレストランに予約の電話を入れた。

食事をしながら、石油会社の重役だった祖父が台湾の石油開発のために単身赴任し、台湾人の女性と暮らしはじめ、四人の子供をつくったことなどが、父親の口から明らかになつた。

異母兄弟たちは父親と伯父を訪ねて何度も日本に来たそうだ。二人は逢おうともしなかつた。

店の外に出ると、夕闇がS家の人々を浸した。

父親は、異母妹と自分の間に家族を挟んで黙って駅まで歩いた。

「明日、墓に案内する」といった伯父の言葉に異母妹は涙ぐみ、「アリガトゴザイマス」と頭を下げた。父親の不愉快は、だんだんと洗い流されていった。

後日、母親はカルチャースクールで台湾語を習いはじめた。国際電話で英子さんと話すためだそうだ。

消えた母親

私の友人は母親が四回かわった。

実母と死に別れた五歳のときから、家を離れて東京に行くまでの十三年の間に――。

一昨年の冬に死んだ彼の父親は、数年おきに職業と妻をかえた。彼の小学校の担任が、いつの間にか夕飯の支度をしていたこともあったそうだ。

ある夏の日の夕方、三人目の母親は「買い物に行つて来ます」と家を出て、そのまま帰つて来なかった。

夏の斜陽が翳^{かげ}つたときから、家の中には哀しみの匂いが漂いはじめた。最初に黙つたのは彼の兄だった。

兄は曇つた視線を自分の掌に落とし、親指の爪で他の指の爪を弾きはじめた。ひそひそ

喋っていた彼の姉と妹も黙りこんだ。

世界中で一番静かな家。

秒を刻む音が岸辺に打ち寄せる波のように響いていた。彼は震えた。家の中は暑いのに、体はだんだん冷たくなってゆく。

彼は、今でもときどきその日のことを思い出すという。そして、買い物袋をぶらさげて、八百屋や魚屋や乾物屋や豆腐屋の前を泳ぐように通り過ぎ、消えてしまった、その母親の後ろ姿を想うと息が苦しくなるそうだ。

彼は劇団を主宰し、演出をしている。いつも「劇団は、血の繋がらない家族のようなものだ」といつている。

彼が酔ったときに必ずする話がある。それは彼がいつか上演したい芝居の話だ。

「舞台は巨大な水槽の中にある。水槽の底には卓袱台ちゃぶだいがあつて、そのまわりで四人の兄弟が遊んでいる。夕飯のおかずを買いに行った母親が帰ってこない。最初、空だった水槽の中にひたひたと水が入ってくる。穴の開いた船に海水が入るように。卓袱台はぶかぶか浮くが、兄弟たちは母親を待ちながら遊んでいる。水かさはぐんぐん増す。母親は帰って来ない。水槽の中が水でいっぱいになり、兄弟たちが溺れた時、笹舟に乗った母親からの手紙が届く。へお母さんは必ず帰るから、もう少し待っててね」

この話をする、彼の眼差しは心の底に固定され、動かなくなる。そして決まって、「でも、金がかかるし、客が入らないから、きつと上演しないだろうな」と逃げるような口調でいう。

その母親が消えてから、彼の兄は食事中に、弟や妹がちょっとでも音をたてると睨みつけ、おしゃべりをする、「うるさい！」と卓袱台をひっくりかえすようになったという。彼の兄は、病弱だった実母を殺したのは父親だと信じ込み、静かに狂っていき、行方不明になった。何年か前に、兄の名前が書かれた羽布団の請求書が彼の劇団の事務所に届いたそうだ。彼はそれで兄がまだ生きていることを知った。

彼も、二度妻をかえ、子供と離れて暮らしている。

彼はいう、「味噌汁の匂いを嗅ぐと、吐き気がして、逃げ出したくなる」と――。

「いいな、複雑な家庭って」

冷房が強すぎる。喫茶店の中は冷凍庫のようだった。半袖のワンピースを着ている私の腕には鳥肌がたっていた。服にしみこむ雨粒のように、隣のテーブルの女の子たちの会話が聞こえてきた。

「いつも、この店でお父さんと待ち合わせするのよ」

私と背中合わせに座っているA子は、母親と協議離婚した父親と、月の最後の日曜日に必ず会うことになっているそうだ。彼女の父親はその約束を破ったことがないという。

A子は振り返って、店の一番奥のテーブルを指さし、

「決まって、あそこに座ってるの。出入り口に背を向けて推理小説を読んでのよ」

「いいな、複雑な家庭って」若さを隠すような濃い化粧をしているB子がつてつけたよ